

くちびるの咲いて白魚吞まれけり

藤田湘子

白魚と言えば二月、早春の季語。有名な

あけぼのや白魚白きこと一寸 芭蕉

が思い出される。

全句集季語索引によれば、第五句集の『春祭』以後、「白魚」で十四句を収録している。酒の肴としても、毎年楽しみに待ちわびていたのではなからうか。

眼目は「白魚吞まれけり」。もちろん同席した自分も白魚をするりと呑んだに違いない。しかし、自分が呑んだとは詠わず、連れ方の女性の誰かが、やや上向き加減に口を開け、半透明の白魚を呑み込んだのだらう。

赤い唇と口紅の色がまるで花のようであったと、男心をそそる一句に仕上がっている。